

異世界

料理で王国の胃袋を掴みます!

# 日帰りごはん



Chikki

ちっき

illust. 薫る石

# 登場人物紹介



ひらたみお  
**平田美桜**

千春と頼子の親友。  
マッチョ好き。



やしうれな  
**矢代麗奈**

千春と頼子の親友。  
魔法の属性は  
『魔』。



**ユラ**

はつきんきつねぞく  
白金狐族の  
女の子で、  
千春の義妹。



ふじいち はる  
**藤井千春**

本編の主人公。  
17歳、高校生。  
ジブラロール王国  
国王夫妻の養女で、  
『聖女』でもある。



**ローレル**

王宮魔導師団長。  
エンハルトの  
幼馴染。



**エンハルト**

ジブラロール  
王国の第一王子。



**ロイロ**

ドラゴン。契約により、  
千春と魂が  
繋がってしまう。



むかいよりこ  
**向井頼子**

千春の親友。  
土地神だった  
ヘビのビエリーを  
管属にする。



## 第1話 婚約!?

ある日突然、十七歳の藤井千春の自宅のクローゼットと異世界の王宮が繋がってしまった。千春限定ながら、行き来も持ち込みも自由自在。これをきっかけに、千春と異世界の人々との交流が始まった。

千春は国王夫妻の養女となり、さらに神であるアイトネから『聖女』の称号まで貰った上に、ドラゴンのロイロや日本で土地神をしていたフェンリルのルプを眷属にした。おまけに、自分が手をつなげば、他の者も異世界と地球を行き来できることまで判明する。

もはや、千春にできないことはない（はず）。

千春は父の大樹に続き、親友の向井頼子と、ひょんなことから彼女の眷属となった元土地神のヘビ・ジェリーも異世界に連れてくる。そんな頼子は、王妃マルグリットの提案により、貴族——千春の侍女のサフィーナの家——の養女となることが決まった。これで、頼子も異世界を思う存分楽しめる。

その後も、千春の応接間にて、みんなで話をしていると——

「さつきから思ってたんだけど、この部屋ちょっと暑くない？ 暖房効きすぎ？ ってか、エアコンあるの？」

そう言った頼子に、千春は首を横に振った。

「いや、こっちは夏なんだよ」

「え？ 季節が逆なの？」

「そ。ここは南半球っぽいんだよねー。他は日本とほぼ同じだね」

「それじゃ、日本は今冬なのに、ここでは海水浴に行けるとか？」

「海いいよねー。ヨリ、お泊まり行ける感じ？」

「大丈夫でしょ。アイトネ様がスマホを使えるようにしてくれたから、連絡取れるし。あー、でも千春のお父さんに一回連絡してもらった方が安心かも」

「お父さんもこっちにいますよ？」

「どこに？」

「多分この時間は、お父様……国王陛下の自室でリバーシしてんじゃないかな？」

千春が答えたところで、ちょうど当の大樹が部屋に帰ってきた。

「千春、お帰り。楽しかったかい？ あ、ドーナツを食べてたのか」

大樹は、テーブルに残されたドーナツの食べカスを見ながら千春に言う。

「あ、お父さんの分も全部食べちゃった」

「いいよ、この人数だからね。お？ ヨリちゃん久しぶり！ 連れてきてもらったんだね。驚いたろ」

大樹は笑って頼子に話しかける。

「はい、めっちゃ驚きました」

「だよー。あ、千春、日本にちょっと連れていってくれるかい？」

「いいよー、またお酒？」

「あー、それもあるけど、将棋しょうぎを取りに行きたいんだ」

「お父様ハマりそうだね。お酒を買うなら、ルプとロイロのも買いたいから、一緒に行つていい？」

「いいよ。でも、この前預けたのは？」

「全部飲み干した」

「まあ、少しだったからね」

「いやいや、結構あったよ！」

「ハハハ、それじゃ行こうか」

「千春、私も荷物持ちするよ」

「私もお手伝いしますね」

頼子とサファイーナもついてくることになった。

「サファイーに翻訳魔道具を渡しとくね」

千春がサファイーナに言う。

「大丈夫です。実家から取り寄せたのを持参しましたから」

「さすがサファイア、抜かりないね」

四人は門を潜<sup>くぐ</sup>って日本に行き、酒屋に向かう。

「大樹殿、わっちはヨリと契約したジェリーと言うもんだ。よろしくな」

「お!？」

大樹は頼子の頭でトグロを巻いている白蛇に突然話しかけられ、ぎよっとした。ジェリーが動かなかったため、今まで気づかなかったのだ。

「ジェリーだね、よろしく。二人を見てくれると助かるよ」

「任せてくれ。まあ、千春には既にわっちより格の高い二人がついとるけん、心配せんでもいいやろけど」

「そうだね。あの二人には、お札にいいお酒でも買つとこう」

「安いお酒でいいんじゃない?」

千春がつれないことを言う。

「気持ちだからね。あー、それとカードを一枚渡しておくよ。向こうに持っていく食べものは、ここから出していいからね」

「えー。お金がめっちゃかかりそう。大丈夫なの?」

「うん、これ見て」

大樹は千春に、指にはめた指輪を見せる。

「何そのダサい指輪。そんな指輪つけてたつけ?」

「いや、お父さんが作った。向こうの金貨でね」

「えー! そんなことできたの?」

「うん、お父さんは土属性があるらしくて、金属の加工ができるんだよ」

「おー。それ、土の上位属性の金属性の力だ!」

「わー! こんなことできるんだ。私もできるかな?」

千春に続いて、頼子も声を上げる。

「お? ヨリちゃんも土属性持ちかい?」

大樹が頼子に言った。

「はい! あと闇もあります。ジェリーのおかげなんですけどね」

「へえ。まあ、とにかくこの金細工を売るから、お金は気にしなくていいよ」

大樹は指輪を外し、千春に渡す。

「ずるーい!」

不満そうな千春に、大樹は苦笑する。

「ずるくないよー」

「未成年には無理だにやー。ちなみに、向こうの金貨の金って、何パーセントくらいの含有率なの?」

「概ねK18って言われる七十五パーセントだね」

「この指輪も？」

「いや、これは純金にしたよ。K24って言われてる百パーセント金」

「そんなこともできるの？」

「うん、化学式や元素記号を知ってたら簡単だね。作ってわかったんだけど、地球じゃ作れない金属も作れそうだったよ」

大樹は思い出しながら、楽しそうに言う。

「例えば？」

「伝説の金属、ヒヒイロカネやオリハルコンだ。魔法を使えば多分作れる」

「お父さんは作れそう？」

「何を混ぜるか、その配合率がわかればできそうなんだよなー、あー！ 向こうで研究したいなあ」  
悔しそうに目を瞑る大樹。

「仕事を辞めてもそれで食べていけそうだね。まあ、もう向こうで暮らせる稼ぎはあるけど」

「そうなんだけど、今仕事でやつてるプロジェクトも終わらせたいからなー。早くても三年、いや、五年かかるかなあー」

「そんなににかかるの？」

「うん、千春が結婚する前には日本に帰ってきたいなあ」

「私、結婚する予定ないんだけど」

「あ、うん、そうだね」

大樹は千春から目を逸らした。

「何？ なんか企んでるでしょ！」

「いや、まあ、そのね？ エイダンさんとメグさんがね、その、第一王子のエンハルト君とどうかな？ ってね？」

「えー！ 初めて聞いたよ、そんなこと！ それに、ハルト兄様が嫌がるでしょ！」

「そんなことないよ。喜んで受けてくれるって言ってくれたよ」

「ええええ！」

「何？ 千春王女から次期王様のお妃様になんの？」

驚く千春に、頼子が尋ねる。

「なんないよ！ ……ね？ お父さん、なんて言ったの？」

「え？ ……了解したけど」

「ちよつとー！ 勝手に決めないでよー！」

「大丈夫だよ。エンハルト君も、千春は来たばかりで今楽しんでるし、落ち着いてその気があればそのとき改めて話をしようって言うてくれてるから」

「もー、どんな顔してハルト兄様に会えばいいのよー」

千春は怒りながら、そして顔を赤くしながら前を歩く。そんな彼女を見て頼子が笑う。  
「ええのう若いもんは」

「ヨリも私も同じ年ですよ」

「あはは、私もいい出会いがあったら、あつちで結婚するのもありなんだけどなあ」  
すると、サフィーナが口を開いた。

「ヨリなら選び放題ですよ？ 養子に入る私のところは侯爵家こうしやくですし、チハルの友達ですから。気をつけないと、どんどん声かけられます」

「マジで!? モテ期到来じゃん!」

「千春ー他人事だと思つてー!」

「あははは、ごめんごめん」

女三人でキャッキヤと話をしていると、酒屋に到着した。

「さて、ロイロとルプは何がいいって?」

大樹が千春に聞く。

「ロイロはウイスキー、ルプは日本酒だね」

「オッケー、何本か銘柄変えて買つとくよ」

大樹は店内を見て回りつつ、カゴにお酒を入れていく。

「千春、欲しいものがあつたら買つていいよ。生活費にはほとんど手をつけてないでしょ。光熱費

もほぼ基本料だったよ、この一カ月」

「あー、ほとんどあつちで生活してたからねー」

千春は、自分の飲みものやユラのジュースをカゴに入れる。

「サフィー、欲しいのある?」

そして、サフィーナに顔を向けた。彼女は紅茶コーナーを見つめている。

「紅茶が欲しいの?」

「紅茶なんですネ、これ」

「そうだよ。色々あるよ、ダージンとか」

サフィーナの隣には頼子がいた。並んで立つ二人を見て、千春が言う。

「サフィーはヨリと姉妹になるんだっけか」

「そうらしいね、どう見ても私が妹よね」

頼子が苦笑する。

「いやー そのおっぱいの差で、ヨリが姉だね」

「なんでよ」

「銀色のアレと、酎ハイちゅうはいも入れとこ」

大樹はカゴに大量の飲み物を入れ、レジに行く。

「お父さん、それ持てるの?」

カゴに入りきらないほどのお酒を買い込む大樹を見て、千春は思わず聞いた。  
「んー、頑張る」

そこへ、ビエリーが声を上げる。

「千春、わっちが運ぶから大丈夫やけん」

「え？ どうやって？」

「影に入れる」

「あ、ビエリーはこっちでも使えるのか」

「魔法と言ったが、わっちはこっちでも呪術として使ったからな」

先に千春のカゴを精算してもらい、千春たちは表に出る。

「千春、そこに置いてくれ」

「はい」

ビエリーに言われて、千春が袋ごと地面に置くと、袋がズブズブと影に沈む。

「おー！ すっごい！」

「あとは大樹殿の荷物やね。みんな手伝っちゃりー」

「はい」

三人はそれぞれ大樹から荷物を受け取って表に出ると、地面に置く。それをまたビエリーが影に沈めた。

そこへ、まだ袋を持っている大樹が店から出てきた。

「はー！ いっぱい買ったー！ しばらく持つか、あれ？ 荷物は？」

「ビエリーが影に収納してくれたよ。お父さん、手に持つてるそれも地面に置いてみて」

「うん、ここでもいい？」

大樹が袋を地面に置くと、やはり影に沈んでいく。

「おお！ すごいな！」

「へっへー。こっちで買えるのときは、わっちを連れていきやーいい。いくらでも入れちゃーけん」

「さんきゅー、ビエリー」

頼子は頭上に手をやり、ビエリーの頭を撫でる。

「よし！ 荷物がなくなったから、他にも買えるものをするか。千春、ケーキでも買っとく？」

大樹が笑顔で言う。

「いいね。私のアイテムボックスなら腐らないし、ちょっとストックしときたいかな？」

「オッケー。女神様にもお礼しないとだし、近くの店で買って帰ろう」

四人はその足でケーキを買い、さらにスーパに寄ってアイスクリームやオヤツを買い漁る。

「お父さん、買いすぎじゃん？」

「まあいいだろ。食費とか全然かかってないし、冬のボーナスも出てるからね！ こういうときに使わないと」



そして、買ったものは人目のつかない場所でビエリーに収納してもらい、みんな手ぶらで帰った。  
「さーて！ 戻ったら松茸<sup>まつたけ</sup>づくしだあ！」  
千春は高らかに宣言した。

## 第2話 松茸<sup>まつたけ</sup>ごはん！

異世界に戻ってきた千春たちは、大樹を門の部屋に残し、代わりに待っていた侍女のモリアンと義妹のユラを連れて城の厨房に向かった。そして、料理長のルノアーに声をかける。

「ルノアーさん、来たよー！」

「おー。チハルさん、いらっしやい。そうだ、前言ってた、米の精米したやつが届いてたよ」

「マジで!? ナイスタイミング！」

「千春、こっちでも米があつたの？」

「頼子が目を丸くする。」

「うん、家畜の餌<sup>えさ</sup>で存在してたよ」

「家畜の餌<sup>えさ</sup>！ アメリカのトウモロコシみたいなもんかな」

「トウモロコシは普通にあるんだよね、ここ」

頼子と千春はルノアーに米を見せてもらう。

「おー？ 何種類かあるんですね？」

「ああ、前言っていたのが、このちよつと長細い米だな。それと、この短いのも栽培<sup>さいばい</sup>されている。他の国ではもっと細長い米もあるらしいが、どれも家畜の餌<sup>えさ</sup>で出回っているな」

「それじゃ、米って安いんですか？」

「安いな。麦の三分の一くらいだ」

「もったいない！」

千春は思わず叫<sup>さけ</sup>んだ。

「それで？ 今日は何か作るのかい？」

「うん、これを使いまーす」

千春は大量の松茸<sup>まつたけ</sup>を出した。

「おー、本当に採<sup>と</sup>ってきたんだな」

「うん、これで今日は松茸<sup>まつたけ</sup>づくしですよ。そうだなー、まずは松茸<sup>まつたけ</sup>ごはんだね」

「こっちでも松茸<sup>まつたけ</sup>が採<sup>と</sup>れるんだ」

千春の持っている松茸<sup>まつたけ</sup>を、頼子は珍<sup>めずら</sup>しそうに見る。

「ヨリちゃん、松茸<sup>まつたけ</sup>食べられる？」

「食べたことない。お吸いものかお惣菜<sup>そうざい</sup>の松茸<sup>まつたけ</sup>ごはんの上にちよんって載<sup>の</sup>ってるやつしかない」

「えー！ それじゃ、今日はいっぱい食べさせてあげよう」

「ルノアーさん、とりあえず米の炊き方はわかります？」

「ああ、前回教えてもらってたからな、炊いておくか？」

「味つけをするのと松茸まつたけを入れてからなので、先に洗って水に浸けてもらっていいですか？」

「了解だ、どれくらい作るんだ？」

「その鍋一個分で、お願いしますね」

「わかった準備しておくよ」

そう言つて、ルノアーは米を準備する。そして、千春も調理に入る。

「それじゃ、最初はダシからなんだけど、ここは粉末使わせてもらおう」

「私は何しようか」

頼子が千春に問いかけた。

「松茸まつたけをスライスしてー」

「了解」

頼子もナイフを持ち、上手にスライスしていく。サフィーナはそれを見て感心する。

「ヨリも料理できるんですね」

「サフィーさんはできないの？」

「最近チハルのお手伝いをしているので、少しだけできるようになりました」

「へえ。そっか、貴族のお嬢様だもんね、サフィーさん」

「姉妹になるんですから『さん』はいりませんよ」

「サフィーおねえちゃん？」

「なんで姉なんですか？」

「誕生日はいつなの？」

「今から月三つほど先ですね」

「今は一月で、私は六月だから、三カ月おねえちゃんだ」

「ほとんど変わりませんよ」

「サフィー姉さまだね」

「ヨリがそれでいいならいいんですけどね」

頼子はサフィーナと笑いながら料理を続ける。

頼子が松茸まつたけを切り終わった頃、それを確認した千春が言う。

「おっけー。ダシ汁を作ったから、米に合わせてもらおう」

そこへ、ルノアーが来た。

「チハルさん、米の準備はできたよ」

「それじゃ、水を切って三十分くらい放置しておいて、そのあとでこのダシ汁と松茸まつたけ入れて炊たいてくれますか？」

「了解だ。水の量は通常と同じでいいんだよね？」

「うん、それをお願いします」

千春は松茸とダシ汁をルノアーに渡し、次の作業を始める。

「千春、次は何作るの？」

「ヨリは何か食べたいのある？」

「知ってる松茸料理だと……土瓶蒸し？」

「土瓶蒸しは作り方を知らないにやー……」

「ネットで調べれば？」

「あ！ スマホ使えるようになったんだった！」

千春と頼子はスマホで作り方を調べる。

「あ、これ簡単だ。めんつゆと水だけで作れる」

「ホントだ、めっちゃ簡単じゃん。ササミってあるの？」

「あるよ、コカトリスだけど」

「コカトリスいるの!？」

「うん、結構美味いよ」

千春はアイテムボックスからコカトリスを出した。

「ルノアーさん、コカトリスのストック減ったから、また貰っていい？」

「ああ、今朝入ったばかりのがあるから持つていいよ」

「ありがとう」

「あと、ミノタウロスとレイクリザードも入ってるから、好きなの持つていったらいいよ。いつものように、冷凍室の横にある半解凍のところに置いてあるから」

「ありがとう！」

「ミノタウロス……美味しいの？」

千春たちのやりとりを聞いていた頼子が、おずおずと聞く。

「めっちゃ美味い。もう国産和牛A5クラス」

「マジか！ なんか作ってよ！」

「おっけー。今度、私の部屋の厨房で美味しいの作ってあげる」

「やった！ それじゃ、土瓶蒸しは私が作るね」

頼子はレシピを見ながらダシを作り、松茸は手で裂いていく。

「千春、スタチって書いてあるんだけど、スタチとかないよね？」

「ないね。ルノアーさん酸っぱい柑橘系の果物ありますか？」

「んー……確かまだ熟れてないやつがあったと思うが」

そう言うと、ルノアーは野菜庫に行き、果物を取ってきた。

「ミカン？」

「青い早生ミカンっぽいね」

千春と頼子は、その果物を見て首をひねる。

「でも、香りはユズっぽいよね。スダチつてもっと大きいよね」

「確かに」

二人はとりあえず半分に切って、片方をスライスし、舐めてみた。

「すっぱー!!!」

「めっちゃすっぱいけど美味しいよ。これでいいんじゃない？」

千春が頼子に言った。

「そだね。んじゃ、これを搾って使うわ」

頼子はユズっぽい果物を搾り準備する。

「おっけ。あとは火にかけて、果汁を入れたら終わりー。千春は何作ってるの？」

「茶碗蒸し」

「おーいいねー」

「はい、モリーこれ」

千春は、モリアンに泡立て器を渡した。

「またこれですか!？」

「いや、泡立てたらダメだから。軽く混ぜるようにやってね」

モリアンはボウルに卵を入れ、ゆつくり攪拌する。

「そんで、またここでめんつゆでーす」

「へえ、めんつゆで作るんだ」

頼子が千春に感心したように言う。

「うん、あと白だしを少しね」

モリアンが混ぜた卵を濾し、ダシと混ぜ、そこにスライスした松茸とコカトリスのササミを入れる。

「千春、エビとかないの？」

「見たことないな、ルノアーさん!」

「なんだー? 何か探してるのか?」

「エビあります?」

「エビ? ああシュリンプか。あつたかなー。冷凍室になければないな」

「探してみるかあ」

千春と頼子、サファイーナが冷凍室に入り、エビを探す。

「チハル、これは?」

サファイーナが千春に声をかける。

「おー? エビ……だけどハサミが長いな」

「エビっちゃーエビじゃん? 千春、これでいいんじゃない?」

「でも身が太いよ、ヨリ」

「そこは切ればいいじゃん」

「……そだね、これを使おう」

そのエビ、を水に入れて解凍してから、ぶつ切りにして器に入れる。その器に他の材料も入れ、そしてアルミホイルで蓋をした。

「おっけ。あとは深めのフライパンに水を三センチほど入れて、真ん中に器を置いてっと」

「へえ、こうやって作るんだ」

頼子が言った。

「うん、沸騰したら弱火にして十分蒸らして終わり」

「めっちゃ簡単だね」

「そだよ、お手軽茶碗蒸し」

そして、千春は少し厚めに松茸をスライスしていく。

「これは？」

頼子は千春が松茸を切るのを見ながら聞く。

「これはーロイロのお酒用でーす」

「お酒にも入れるの？」

「そ、松茸酒。日本酒の熱燗に松茸を炙って入れるだけ。美味しいかどうかは知らない」

「飲んだことないもんねえ」

「まあね、ヨリ飲んでみる？」

「んー舐めるくらいなら」

「私はいらないけどね」

二人は苦い顔をして笑う。

「おっけ。あとはごはんが炊けたら全部終わるねえ。ヨリ、私の部屋で食べる？」

「そうだね。ここって広い食堂だね。社員……王国の人が食べに来るの？」

「うん、兵士さんとか侍女さんメイドさん、色々食べに来るねー」

「ユラもたまにたべにくるよ！」

ユラが元氣よく言った。

「ユラちゃんはお父様たちと食べてるんじゃないの？」

ユラに千春は聞き直す。

「夕食はだいたい王族と一緒に食べになりますが、朝食や昼食はここで私たちと食べることがありますね」

サフィーナが代わりに答えた。

「そうなんだ」

「ええ、王族の食卓くらいに美味しい食事が揃ってますからね。評判いいですよ？」



サフィーナが微笑むと、千春は口を開いた。

「それじゃ、できたのからアイテムボックスに入れていこう」

「チハルさん、香味茸を少し分けてもらってもいいかい？」

ルノアールが尋ねる。香味茸とは、この世界での松茸の呼び名だった。

「いいよ。私が出したやつ全部使っていよいよ。まだ半分入ってるし、サフィーも同じくらい入ってたよね？」

「ええ、多分チハルよりたくさんあります」

「ありがとう。チハルさん、俺も米を使ってみたいから、夕食に香味茸ごはんを出してみるよ」

「うん、一緒に出す食事は醤油ベースのおかずの方がいいかな」

「わかった、ありがとう」

そして、松茸ごはんもでき上がったので、アイテムボックスに入れると、千春たちは門の部屋に戻る。

「たっだいまー」

「おかえり千春、松茸ごはんはできたのかい？」

門の部屋で待っていた大樹が出迎えた。

「うん、できたよー。あと、茶碗蒸しと土瓶蒸しも作ってきた」

「いいねー」

「チハル！ 松茸酒ってのはできたのか!？」

ロイロが期待に満ちた目をしている。

「ちゃんと準備してるよー。それじゃ、応接間で食べよう」

千春は松茸ごはんを出し、茶碗蒸しと土瓶蒸しも並べる。

「それじゃいただきます」

「[[[[[[いただきます！（じゃー）]]]]]]」

「んー！ 松茸ごはん美味しー！」

千春は松茸ごはんを満足そうに食べる。

「うわあ！ 超美味い！ 松茸ってこんな味なんだ！」

頼子も松茸ごはんを食べて唸った。

「うん、土瓶蒸しも美味しいね」

「お父さん、それはヨリが作ったんだよ」

「へえ！ 美味しいよ、ヨリちゃん」

「へへー。ホント美味しい」

大樹は土瓶蒸しを食べながらニコニコしている。

「チハルおねえちゃん、ちゃんむしおいしい！」



ユラは茶碗蒸しが気に入ったようだ。

「プリンと作り方が一緒だと言ってしまったが、本当でしたね。見た目が似ているのに、こんなに食感も変わり、味も深い。とても美味しいです」

サフィーナはいつものように感想を言いつつ味わっている。

「松茸ごはんは初めて食ったぞ、俺」

「俺も初めてじゃが、不思議な香りで米というのとよく合うの」

「わっちは昔お供えで食ったことがあつけど、百倍美味しい気がするな」  
ルプ、ロイロ、ビエリーが言う。

「それよりも俺はこっちじゃな、松茸酒！ 熱燗もいいのー！」

「そうだな、この酒は美味しい、香りがなんとも言えんな」

「わっちもこれは好きだ、めっちゃうめえ」

さらに三人は酒を飲んでいる。

「……モリー、えらい静かじゃん」

普段は美味しいものを食べると大騒ぎするモリアンが何も言わないことを、千春は疑問に思った。

サフィーナも頷く。

「ほんとですね」

「今日は叫ばないのかい？」

「モリーおねえちゃん？」  
「え？ モリーちゃん、叫ぶの？」

千春とサフィーナだけでなく、大樹、ユラ、頼子——みんなに見つめられているモリアンは、黙々と松茸ごはんを食べていた。

「……………もぐもぐもぐ……………美味いですー！！！！！！！！」

不意を突かれたため、サフィーナはいつものように突っ込めなかった。

「うん、いつものモリーだ」

「いつもこうなのね」

千春と頼子は目が合い、大笑いした。

### 第3話 明日は何するかな！

食後——

「ヨリちゃん、今日泊まる？」

「んー、一回帰ったほうがいいだろうなー。お正月だし」

「そっか。それじゃ、向こうまで送るよ」

千春は頼子とビエリーを連れて、門を潜った。

「千春、帰ったら連絡するよ」

「うん、よかったら明日も——」

「もちろん来るよ！！！」

「お、おう、待ってるよ」

「それじゃねー」

頼子はビエリーを頭に乗せて帰っていった。

「ビエリーの収納便利だなー、手ぶらじゃん」

二人を見送った千春は、部屋に帰ってきた。すると、大樹が尋ねてくる。

「千春、今日はどうするんだい？」

「んーちよつと疲れたし、お母様のところで温泉に入ったら寝るよ」

「そっか。お父さん、あの客間をずっと使っているから、お父さんも今日は王国で過ごすよ」

「うん、わかった。あ、あと、私はスマホ使えるから、何かあったら連絡しようだい」

「……お父さんは、ここまで来ないと使えないんだけど」

「あー……（アイトネー……）」

『（なーに？）』

千春の頭に、アイトネの声が聞こえてきた。

「お父さんもスマホ使えるようにできないかなー……」

『いいわよー、こっちからスキルつけるわねー。動かないでね』

「お父さん、ちょっと動かないでね」

「うん？ わかった」

すぐにアイトネから声がかかる。

『できたわよー。充電もできるようにしておいたからー』

（ありがとー。またお菓子持ってくるね！）

『はーい、またねー』

「お父さんも使えるようにしてもらったよ」

「え？」

「今アイトネにスマホを使えるようにしてもらったよ。あと、自分のMPで充電もできるよ」

「本当か？　すごいな。そんなことができるんだ、女神様って」

「うん、私とヨリもつけてもらったんだけど、すごい助かる」

「それじゃあ、千春たちがお出かけしても電話できるの？」

「らしいよ？」

「そっか。お泊まりで出かけてると連絡取れないから不便だったもんね」

大樹はスマホの充電の表示を見る。

「本当だ。充電されてるね」

「手に持たないと充電できないのか。まあ、充電早いみたいだし、持つくらいいいか」

「そうだね。本来なら向こうに戻らないと充電できないわけだし、バッテリー持ってきてても限度があるからね」

「さて、ユラちゃん、お母様のところに行こうか」

「うん！」

ユラの返事を確認してから、千春はサファイーナに顔を向ける。

「サフィー、今日のお仕事はこれで終わりで」

「ついていきますよ？」

「お母様のところでお風呂入って寝るだけだよ？」

「はい、そこまでが私の仕事ですから」

「……はい」

マルグリットの部屋に三人で向かうことになった。モリアン、コラリー、ドロテの三人侍女は業務終了だ。

「お母様来ましたー」

「いらっしやい、チハル、ユラ」



「今日はお風呂いただきに来ました」

「久しぶりに一緒に入りましょうね」

侍女が湯浴みの準備ができたと伝えると、三人はお風呂に入る。

「今日の夕食はチハルのレシピなのよね？」

「え？ 今日は何が出たんですか？」

「香味茸のごはんが出たわよ。あと、茶碗蒸しもチハルのレシピだそうね」

「あ、王族の夕食にも出すって聞いてなかったもので。どうでした？」

「美味しかったわよー。珍しい茸らしいわね。この間はあれを採りに行ってたんですって？」

「そうなんです。日本でも希少な茸で、値段も高いんですよー、ルノアーさんに見せてもらって食べなくなったので採りに行きました」

「行動力あるわよねーチハルって。まあ、ロイロがいたからできたんでしょうけど」

「はい、馬車で片道七日ですからねえ。ロイロがいないと行けませんでしたね」

「馬車で七日をどれくらいで移動できるのかしら」

「行きはのんびり行って四時間で、最後リヴァアイアサンに乗せてもらって湖を渡ったので五時間ですね。帰りは直行だったから三時間くらいですか」

「リヴァアイアサン……たしか水神様がいますって噂は聞いたことはあるけど」

「はい、その水神様がリヴァアイアサンでした。とてもいいドラゴンさんでしたよ？」

ユラもウンウンと頷きながら、マルグリットを見る。

「七日を三時間くらいねえ。それじゃあ、ローレルが行ってるハース領まで五時間かからないのね」

「西にある海の街ですか？」

「ええそうよ。今ローレルが向かってると思うけど」

「海かー。こっち夏ですもんねー。行きたいなー」

「行ってくればいいじゃない。ハース伯爵には手紙を書いておくわよ？」

「いいんですか!？」

「ええ、タイキさんも最近はいイダンと一緒にショウギというのにハマってるみたいだし、チハルも遊びたいでしょ？」

「はい！ ヨリも連れて行っていいですか？」

「いいわよ。ちゃんと手紙には、侍女ではなく貴族の娘で、王女二人の大事なお友達って書いておくわ」

「ありがとうございます」

「チハルおねえちゃん、うみいくの？」

「うん、ユラちゃんも行くでしょ？」

「いくー!」

「ユラは海を見たことあるの？」

「ないです！ おかあさま！」

「それじゃ楽しみね、フフツ」

三人はお風呂から上がり、マルグリットは手紙を書いた。

「はいチハル、この手紙をハース伯爵に渡してね。あと、この短剣を持っていって」

「短剣ですか？」

「ええ、必要ないかもしれないけど、王国の紋章がついている王族の短剣よ。何かあったらそれを見せなさい。見せても聞かないような輩は、ロイロとルプに命令していいわ」

「なんて命令するんですか？」

「なんでもいいわよ。不敬で処理していいわ」

そう言うと、マルグリットは首に手をやり、横にスッと動かす。

「ひいっ」

「フツツ、チハルはそんなことしないわね。でも遠慮なくていいって、ロイロとルプには言っておきなさい」

「はいわかりました」

三人は久しぶりに一緒にベッドに入り一晩過ごした。



「ビエリーって歳いくつくらいなの？」

千春と別れた頼子は、帰りながらビエリーに聞いた。

「わっっちゃー？ 五百歳くらいやなかったかな？」

「すっごい長生きなのね」

「いや、五十年くらいで一度死んだはずなんやけど、神社で死んだからか、生き返ったんよ」

「蛇って五十年も生きるの？」

「そんなに生きるのはおらんな。わっちはなぜか生きてたなあ」

「それで土地神になったの？」

「んー、気づいたら神社で厄災祓<sup>はら</sup>ったんよね。祀<sup>まつ</sup>ってくれる人くらいは守るかなーってな？」

「それで、ルプ君の神社にお邪魔してたのね」

「隣の神社がなくなってたな。まあしゃーない。大きなマンションが建ってたわー」

「世知<sup>せちがら</sup>辛い世の中だねえ、神様も」

家に帰り着いた頼子は、ビエリーに荷物を出してもらってから家に入る。

「お母さん、ただいまー」

「お帰り頼ちゃん。千春ちゃんは元気だった？」

「うん、めっっちゃ元気だったよ。千春のお父さんも帰ってきて、めっっちゃ元気だったよ」



「あら、藤井さん帰ってきてたのね。大変よね、長期海外出張って」

「うん、大変そうだったよ。すごい今羽伸ばしてたもん」

「それはよかったわね、携帯で晩ごはんいらなんて言ってたけど、いいの？」

「うん、千春の作ったごはん食べてきたからお腹いっぱい」

「それじゃ、お風呂入っておいでー」

「はい」

頼子はお風呂に入ったあとでリビングに行くと、母が一人でテレビを見ながらお茶をしていた。

「あがったよー、お父さんは？」

「叔父さんのところで飲んでるわよ。正月は飲んでも怒られないと思って好き放題よ」

「あはは。まあ、うちのお父さんも羽伸ばしてんだねー」

「ま、正月休みくらいは許すわよ」

「心が広いことで」

「それで、頼ちゃん、その頭に乗ってる白蛇は何？」

「え!？」

急な母の発言に、頼子はぎょっとした。

「悪い憑きものじゃないのはわかるからほっといたけど、何かなーってね？」

「ビエリー、姿消してるんだよね？」

「消しとるよ？」

「へえ、会話できるのね、どこかの土地神かしら？」

「お母さん、なんでわかんの？」

ビックリしながら頼子は母を見る。

「お母さんの実家はなんですかー？」

「……神社」

「お母さんの結婚する前の職業はー？」

「巫女さん」

「で、そのビエリーちゃんはなーに？」

「えっとねー……………」

頼子は、千春とともに神社でビエリーに会い、異世界へ行き名前をつけてしまい、契約したことなどを話した。

「はあー！ 不思議なこともあるのねー。全部本当なのよね？」

「うん」

「それで、ビエリー君……なのかな、頼ちゃんがごめんなさいね」

「んにゃ。ついていったのは自分やし、ヨリに名前をつけてもらったことも後悔しとらんよ。母君も気にせんでくれ」

「そう言ってもらえると巫女<sup>みこ</sup>としても助かるわ。それじゃあ、頼ちゃんをよろしくね」  
「ああ、わっちが責任もって守るけん」

ビエリーも頼子の母に胸を張って答える。

「はあ。それじゃ、今日もその違<sup>ちが</sup>う世界に遊びに行<sup>い</sup>ってたのよね」

「うん」

「明日も行くの？」

「行くつもり、ダメ？」

「いいわよ。千春ちゃんも千春ちゃんのお父さんも行<sup>い</sup>ってるんでしょ？」

「うん」

「女神様ともお友達なら、滅多<sup>めった</sup>なことはないでしょ。気をつけて遊びなさいよ」

「はーい。ありがとう、お母さん」

「お母さんもお風呂入<sup>い</sup>ってくるわ。寝<sup>ね</sup>るなら鍵<sup>かぎ</sup>を閉めてね」

「はーい、おやすみなさい」

頼子は家の鍵を閉め、自分の部屋に行く。

「はあー！ びっくりしたー」

「わっちもビックリしたぞー」

「でも、内緒<sup>ないしょ</sup>にして遊びに行くのは罪悪感あ<sup>あ</sup>ったから、よかったかも」

「そうやね、わっちも安心した」

「それじゃ、お休み、ビエリー」

「おやすみー」

二人は明日を楽しみにしながら眠<sup>ね</sup>りに就<sup>つ</sup>いた。

#### 第4話 目指すは海の街ハース領！

「お？ ヨリちゃん来たね」

翌朝、朝食を終えた千春が、門の部屋でマッタリ過<sup>すご</sup>していると、頼子からスマホに連絡があつた。ユラが千春の言葉に反応する。

「ヨリおねえちゃん、きたの？」

「うん、玄関まで来てるって。迎え行<sup>い</sup>こうか」

「うん！」

千春はユラと門をくぐり、自宅の玄関に向かう。扉を開けると、頼子が立<sup>た</sup>っていた。

「はーい、いらっしやーい」

「おはよー！ ヨリおねえちゃん！」

「おはよー、ユラちゃんおはよー」

ユラと頼子は手を合わせタッチする。

「ヨリ、さっきも軽く言ってたけど、お母さんにバレたってマジ？」

「マジ。昨日帰って速攻バレてたみたい」

「ビエリーは姿を消してたんでしょ？」

「わっちは消えてたけどバレたなあ」

頼子の頭の上にいるビエリーが言う。

「靈感があるって昔から言ってたのは聞いてたけど、すごいねえ、ヨリママ」

「ほんとビックリだよ。しかも、悪い憑きものじゃないって、最初スルーしてたからね」

頼子が千春に頷いた。

「へえ、そういうのもわかるんだね」

「わっちもその手のは見たらわかるから、似たような感じなんやろね」

ビエリーが納得したように言う。

千春は玄関の鍵を閉めると、四人で門を潜り、応接間に行く。

「で、千春、お出かけの許可も取ってきたけど」

「うん。あれは持ってきた？」

「引っぱり出してきたよー！ 日本では季節外れもいいところじゃん」

「まあ、私も引っぱり出したけどね」

そう言うと、千春はアイテムボックスから水着を取り出した。

「おー可愛い持ってたね。てつきりスク水かと思ったわ」

「ひどっ！ 一応持ってるよ」

「こっちのメンバーは水着とかあるの？」

「一応あるらしいけど、ちよっと……結構………かなりダサイ」

「いいんじゃない？ 別に誰に見せるわけでもないっしょ。男って、ルプとビエリーで、人じゃないし」

「そりやそうだ」

「それで？ 二泊三日なんだよね？」

「そ、片道五時間の予定だけど、のんびり途中で街に寄るかもだから、初日は夕方までに到着すればいいかなーって感じ」

「ふむふむ。準備は？」

「食材も入れたし、テーブルとかはサファイアが全部用意してくれてる。バーベキューコンロも借りてきたから、どこでも料理できるよ」

「さっすが。私は着替えと遊び道具しか持ってきてないよ」

「おっけおっけ、問題ないよ」

そうは言っても、千春は一応確認することにした。ジェリーが影から荷物を出し、千春が見えていく。問題はなさそうだ。

「ほんと便利だわ。私も日本で使えたら最高なんだけど」

「ヨリはわたちの呪術を覚えれば使えるかもしれないが、無理はせんほうがいいんやないかな。必要ならわたちが入れるし」

「そだね。MPが回復しづらいつて言ってたし、日本ではジェリーに任せるよ」

頼子とジェリーはそう言いながら、確認が終わった荷物を分担して入れていく。

「おっけ、私の方も準備できたし、ヨリは朝食食べた？」

頼子が荷物を影に収納したのを見て、千春が声をかける。

「軽く食べたよ」

「わっちも貰<sup>も</sup>って食べたぞー」

「そっか、それじゃ出かけますかあ！」

「何人行くの？」

「私、ヨリ、ユラ、サフィー、モリー、ルプ、ロイロ、ジェリー」

「八人？」

「ロイロは運ぶ係だし、ジェリーは人数に入らないくらい小さいから、五人とソファアが一人だね」

「何、ソファアって」

「行けばわかるよ」

みんな揃ってゾロゾロと馬車置き場へ向かった。その途中、千春がロイロに尋<sup>たず</sup>ねる。

「ロイロ、まだロイロ用の馬車はできてないけど大丈夫？」

「ああ、朝聞いたら、とりあえず広めの馬車に持ちやすいところをつけたものがあるそうじゃ」

馬車置き場に着くと、大樹やエンハルトがいた。

「お、来たね。千春、この馬車で行くんだね」

大樹が見ている馬車は、王族の馬車にしてはシンプルだが、比較的大きめの箱馬車だ。

「おー！ 立派だー。これならみんな乗っても余裕だね」

「椅子<sup>いす</sup>は外して、敷物を敷いてあるらしい。あと、馬が引くところも外して、代わりに上に持ち手をつけたそうだ」

エンハルトが教えてくれた。

「仕事早っ！ 昨日言ったばかりじゃん」

「ああ、昨日大工と魔法使いに説明したら、その場で加工してくれたらしいぞ」

「魔法で加工したの？」

「ああ、エルフの精霊魔法で木を加工できる技術があつてな。大工のところに一人いるんだよ」

「「エルフ！」」

千春だけでなく、頼子も反応した。

「エルフが珍しいのか？ 王国に結構いるぞ。今度紹介してやるよ」

「あ、ありがとうございます、ハルト兄様」

近くに来てニッコリと笑うエンハルトに、昨日の話を思い出した千春は顔を真っ赤にして俯く。

「初めまして。千春と同じ世界の同級生、向井頼子と申します」

ペコリと頭を下げ、エンハルトに挨拶をする頼子。

「初めまして。ジブラロール王国第一王子のエンハルトだ。チハルの友達なら、気軽にハルトと呼んでくれ。敬語もいらんならな」

「いいんですか？」

「本人がいいって言ってるんだ、問題ない。仲良くしてくれ」

「はい！」

「馬車に乗る人数は……五人とルプか？」

「あ、私の頭の上にいるジェリーも行きます」

「お、この子が君と契約した白蛇か、よろしくな」

「よろしくしてくれ、王子」

「お前もハルトでいいぞ」

エンハルトは手を伸ばして、頼子の頭にいるジェリーの頭を撫でながら言う。

「さて、サファイ、俺の荷物も入れてくれるか」

「はい……ハルト殿下も行くのですか？」

「ああ、楽しそうだからな。あと、変な虫がつかないようにと、母上から言伝えされてる」

「あー、お母様が何か考えてたもんね、海に行くって話してたとき」

千春が頷いた。

「そりゃさうだろう。ロイロやルプがいるとはいえ、女ばかりの旅行だから、心配もするさ」

「それじゃ六人？」

「いや、執事二人連れていくから八人だ。ロイロ、大丈夫か？」

「馬車に乗れるなら大丈夫じゃ。ルプが風を押さえてくれるから、僕も馬車を軽くする魔法をかけるだけで済むからの」

「わかった。それじゃ、サファイ、荷物を頼む」

「はい、収納し終わっております」

「早いな」

荷物がすべてなくなり、みんなは馬車に乗り込む。そして、千春は大樹に叫んだ。

「お父さん、行ってくるね！」

「何かあったらすぐ連絡するんだよ？」

「うん！ では、二泊三日の旅行にしゅっぱーつ！」

千春の声にあわせて、ロイロはドラゴンになり、馬車を掴む。

『それじゃ行くぞー!』

「はーい、よろしくー!」

「うっわドラゴンすつご! マジでドラゴンなんだ!」

頼子は初めて見るドラゴンに驚いていた。ふわっと浮き上がり、ぐんぐんと高度を上げると、ルプが魔法をかける。頼子はそれに気づいた。

「風魔法?」

「ああ、前はロイロがかけていたんだが、俺もロイロも風魔法が強化されているからな。俺が風の抵抗をなくして、ロイロは運ぶ方だけにしてもらった」

「ありがと、ルプ」

千春はそう言つて、ルプのお腹に飛び込んだ。ユラも定位置になったルプのお腹に抱きついている。

「あー……ソファアーね」

「そ、ルプソファアー」

ソファアの意味を理解した頼子に、千春が言う。

「私もいい?」

「構わんぞ」

「さんきゅールプ君」

頼子はユラの横に行き、ルプに寄りかかる。

「うっは、ふわっふわじゃん」

「ルプふわふわー!」

「だよーね」

エンハルトと執事二人は、頼子、ユラ、千春の微笑ましい姿を見ながら笑っていた。そのとき、馬車が軽く揺れる。

「うおっ!」

「うあわあ!」

「きやあ!」

執事二人とモリアンが叫ぶ。

「大丈夫だよー。速度を出すとき数回揺れるだけだから」

「まあ慣れるぞ。俺も初めて乗ったときは声が出たからな」

千春とエンハルトが執事たちに声をかける。それから、千春はエンハルトに尋ねた。

「それで、計算だと言いたい五時間くらいなんだけど、途中寄れそうな街とかある?」

「あるにはあるが直線上にはないな。小さな村くらいならあるだろうが」

「そっか、地図とかあればいいんだけど」

「そうだな。だが、おおよその地図しかない。街道を見ながら行くしかないな」

「正確な地図はないか」



「ないこともないが、軍事用の地図だから持ち出しが面倒なんだよ」

「あー、そういうことねー。それじゃ、ロイロに広い場所でもあったら休憩きゅうけいを入れてもらおう」

その後、千春はロイロに声をかける。『了解りやうじゃー!』と返事があった。

「では、のんびり空の旅を楽しみましょうかね」

そう言って千春が出したのはトランプだ。

「トランプしてたら空見られなくね?」

頼子が突っ込む。

「それはそれ、これはこれ、♪ トランプする人ー!」

「「はーい!!」」

「全員するんじゃーん」

## 第5話 蜂蜜はちみつたっぷりホットケーキ!

みんなでのトランプも一段落し――

「ヨリ、何見てんのー?」

窓から外を見ている頼子に、千春が声をかける。

「いやー、異世界なんだなーって思ってた。でも、魔物とか闊歩かつぽしてるわけじゃないんだよね」

「そういえば、そんな魔物は見えてないね」

「そりゃそうだろう。あっちこっちに魔物がいたら、俺たちが生活できないからな」

頼子と千春の話を聞いていたエンハルトが答える。

「確かにね。千春はこっちでよく出かけてるの?」

「いやー? ぜんっぜん、ほとんど王都から出てないよ。昨日松茸狩まつたけり行ったのと、湖がある町に行ったくらいだね」

「そっかー」

『チハル、そろそろいい時間だが、休憩きゅうけいするか?』

ロイロが声をかけてきた。

「そだね、そろそろ休憩きゅうけいしようか。いいところありそう?」

『左の方に小さな町があるようだが』

「どこ……?」

千春と頼子は左の窓から進む方向を見るが、何も見えない。

『もう少ししたら見えてくるじゃろ。降りるなら手前で降りるか?』

「入り口手前でかまわんだろ。俺もいるんだ、事情は門番に話をする」

エンハルトが言った。